リリパット・アーミー公演　笑殺劇『X線の午後』

1986年6月23日～24日　扇町ミュージアムスクエア

キャスト

中島らも……巨人／父
わかぎえふ……レム
加納真士……MC／ビグマリオン
鮫肌文珠……文珠／物売B
ガンジー石原……じい／ガンジー石原／モモロ／女
キッチュ……キッチュ／岡本太郎／マルコス
ひさうちみちお……物売A
木本雄一郎……キュクロプス
牧野恵美(賓名行為)……メア
清瀬順子(満開座)……母／アナウンサー／通訳
仁王門大五郎(満開座)……仁王門
吉鶴……兄

スタッフ

作・演出……中島らも
演出助手……若木之芙
照明……藤沢浩三
音響……吉本たもつ
写真……垂水章
選曲……木本雄一郎
イラスト……ひさうちみちお
宣伝美術……杉崎真之助
協賛……カネテツデリカフーズ株式会社

リリパット・アーミー公演　『フレームレスTV』

1986年12月8日～10日　扇町ミュージアムスクエア

キャスト

中島らも……艦長／関根ディレクター／グリークラブ
わかぎえふ……イリヤ／おちゃめ侍・徳之進／鈴木フキ先生／女優B／母
キッチュ……代官／患者のおじさん／グリークラブ
牧野恵美(賓名行為)……女性アナウンサー／女優A／掃除のおばさん
立原啓裕(賓名行為)……司会者／患者のじいさん
升毅(賓名行為)……社長2／商人／アサツキ／グリークラブ
ひさうちみちお……土方／AD／白寿
鮫肌文珠……マーシー／干し坊主オラヘン
ガンジー石原……売子／NHK集金人／米寿
加納真士……バフ／加納教授／喜寿
木本雄一郎……サセックス木本／社長1／息子

スタッフ

作・演出……中島らも
演出助手……わかぎえふ
照明……藤沢浩三
音響・選曲……吉本たもつ
音響効果……せんば&トシ
作詞・作曲……中島らも
写真……垂水章
イラスト……ひさうちみちお
宣伝美術……杉崎真之助
協賛……カネテツデリカフーズ株式会社

あとがき

15年前にOLだった私は劇団を作ろうと企てていた。もともと大阪で芝居をやっていて友達と劇団を作ろうと誓い合っていたのだ。しかし、21歳の時、その友達を置き去りにして東京に出た。一度はちゃんと芝居の勉強なるものがしてみたかったからだ。

そして5年も経って大阪に戻った。こうなったら待たせた約束を果たすためにも劇団を旗揚げしなくては！とやる気満々だった。そう、あれが1986年。おりしも、大阪では劇団☆新感線とか、南河内万歳一座とかが若手の劇団として、世間の注目を浴び出したころだった。

長年の友人であった中島らもに「私、劇団作るねん」と言うと「ぼくも」と彼が答えた。

"それがリリパットの始まりだ。

あれよあれよと言う間に劇団が出来上がった。私が作ろうと言い出したのに、中島が友達をかき集めてきて、作ってしまったのだ。

「ほら、劇団のメンバー集めたよ」という感じだった。

で、よく見ると、タレント、マンガ家、編集者、バンク少年、エディターにコピーライター、ミュージシャンと、芝居のしの字も知らない奴ばかりが集まってる。みんな「どうしたらええのん？」と言う人ばかりだ。私が一緒にやるはずの友達は、その時点であきれてやめてしまった。

なのに、中島は張り切って「X線の午後」という、頭のわいたような脚本を書いてしまった。

「さぁ、やろう！」というノリで旗揚げしてしまった。もうどうにも止まらない～という雰囲気だった。大阪中の尖った若者が「中島らもが芝居？ふん、面白そうやん、いっぺん見たろー」と言って、見に来た。

おかげで劇場に入り切らないほどの人が来て、大盛況…。

「な、なにこれ？私こんなんするつもりやったんとちゃうねん」と言ったが遅かった。そう、私はリリパットアーミーのメンバーとしてデビューしてしまったのだ。

「X線の午後」は何が面白いのがさっぱり分からないまま終わってしまった。今読み返しても、あの当時の中島が何を考えて書いていたのかまったく解らない。

ただ、当時の大阪の若者がひっくり返って笑ったということだけは事実だった。

新劇の影響を受け、アングラの劇団で育ったという、けっこうチャンポンに慣れてた私の頭でさえ、ぐちゃぐちゃになった。なぜ面白いのか、何がこんなに観客を興奮させるのか？さっぱり理解できなかったからだ。

しかし2本目に「フレームレスTV」をやった時は少し謎が解けた。

みんな今までに見たことのないものが面白いのだな、ということが解ってきたからだ。実際に芝居の概念というもののない中島の脚本はぶっ飛んで、軽妙さがあり面白かった。

もちろん、読んだだけじゃなく、当時のキャストがその本に当てはまっていたということもあったが。

「ふーん、芝居ってやったもん勝ちかも」と演劇少女の成れの果てだった私が刺激を受けたことは言うまでもなかった。大阪で生まれて大阪で育ったわりには、芝居に関しては東京の方が偉い、と決めつけてた私には新鮮な驚きだった。

それまでは、なんでも理想を追う一方だった自分が、地に足をつけて、何でもあるもん使うたらええやんという主義に変わったのも初期のリリパットのメンバーのおかげだろう。

と、今では感謝までしてるが、当時を思い出すと本当にたいへんだった。なんせ「今日はお腹が痛いんで休みます」という役者もいたし、「明日、子供を幼稚園に迎えに行く当番なんですけど…遅刻してもいいですか？」と聞いてくるスタッフもいた。

「なに考えてるの！」と叫びまくった初期の3年間だった。

おかげで、一緒に劇団を作る約束をしていた友達が愛想をつかして「やっぱり、やめるわ」と音信不通になった。

こんな出会いで15年。まったく人間諦めずにやってみるもんである。まさか、初期の脚本が出版されるなんて夢にも思わなかったことだった。

（なお、当時、自分がなにを思って書いたか忘れてる中島らもの代わって、あとがきを書いてるので、少々自分に都合のいいことで構成してることを認めます。）

2001年冬　わかぎえふ